

第3章 和辻哲郎—日本語と哲学の問題 ①

第1節 国民的特性としての言語

和辻哲郎 (1889〈明治22〉年～1960〈昭和35年〉)が、ハイデッガーの存在論を『続日本精神史研究』のなかで思索した論文「日本語と哲学の問題」(昭和4年稿、10年加筆)は、

- 1 国民的特性としての言語
- 2 日本語の特質
- 3 日本語と哲学の問題
- 4 「こと」の意義
- 5 「いうこと」の意義
- 6 言う者は誰であるか
- 7 「ある」の意義

の7項目から構成されている。『続日本精神史研究』巻頭論文・「日本精神」の一、〈日本精神とは何かという問題〉が提起する結論にあたる論考である。和辻はその結語において「日本語をもって思索する哲学者よ、生まれいでよ」としめくくったとき、和辻哲郎文化賞を受賞した埼玉大学名誉教授・長谷川三千子が指摘するように、和辻はたしかに、きわめて重要なことを語っていたのだ。それは単に、日本人はいかにして西洋の学問を昇華、吸収しうるか、という問題ではなく、これまで誰も足を踏み入れたことのない未知の哲学的領域を、未知の方法によって探求し、きりひらいてゆく、という決意だったのである(『日本語の哲学へ』ちくま新書、8頁)。

その和辻の「日本語をもって思索する哲学」のころみとは、これまでのどのような哲学にも属さない「未知の泥海」へと通じているのを垣間見たにちがいないこと、この消息を理解してもらうために、和辻の「日本語と哲学の問題」の一、〈国民的特性としての言語〉の書きはじめの基本的要旨と、七、〈「ある」の意義〉と題された重要な結論部分を引用しておきたい。これ以来、「和辻神話」といわれるこの言葉にとりつかれたように関連学術研究者が数おおく生まれ出たと思われるからである。和辻は「国民的特性としての言語」において、考察の目的を次のように冒頭で述べる。

この小論において試みるのは、日本語という一つの特殊な言語を通じてこの民族の精神的活動の根本的な一面を解釈しようとする精神史的な考察である。だからここには当然、理解によって接近すべき精神史的世界がすでに純粋なる言語に表現せられていること、従ってフンボルトの言ったごとく、一つの民族の精神的特性と言語形成とは密接に融合せられたものであり、もしその一つが与えられれば他はそこから十分に導き出され得るといふことの認識を先立てねばならない。

フンボルト (1767～1835) は、1806年プロイセンがフランス国民軍に敗れたとき、身分や職業とは関係なく、人間としての個人の完成を目的とする教育理念を確立し、西欧古典を典拠としたギリシャ語・ラテン語の学習を重視した教育制度改革や「新人文主義」の基礎を作ったドイツの政治家・文人・言語学者であった。フンボルトは人間の言語活動の中に精神の働きそのものを見出し、諸言語の有機的構造は直接その言語を語る民族の精神的特性、つまり「世界の見方」を示していると主張した言語学者としても知られる。

和辻はフンボルトに同調して、言語は民族の精神が外に現れ

たもの、「一の国民的、個性的生活の精神的呼吸」であり、言語の構造は国民の精神的特性そのものであるとする。すなわちその特性は「世界の見方」を示している。そして、その人間の精神的特性の問題は、歴史の形而上学と連結せざるを得なかったとして、「人間の精神力の生産」の言語を超えた普遍性について、ハイデッガーの存在論を批判している。和辻は「それぞれの特殊な言語を離れて一般言語などというものがどこにも存しない」(509頁)というわけだ。ちなみに、ハイデッガーの『存在と時間』は、1927(昭和2)年、和辻が留学した年に出版されているが、和辻のハイデッガー批判の根拠は「ハイデッガーの力説する Dasein は根本においては個人であって、個人的・社会的なる二重性格を有する人間存在ではない」からだとする。

和辻のハイデッガー解読の浅薄の問題についての諸議論は後に紹介するが、わたくしがここで注目したいのは、漢語を排し日本語の土俗的和歌スタイルで美しく表現された中山みき直筆の『おふでさき』を、漢語や維新後わが国の近代化による欧米語から日本語訳された思想言語を主たる解釈の手立てとせず、それとは逆に『おふでさき』が歴史的にもつ、それ自身の日本語(やまとことば)の独自の・個的表現から、あらたな普遍的思想が抽出できないかという問題である。わたくしからすれば、歴史的日本語であるローカルなやまとの土俗的言語表現から、一天理教信仰者の精神的呼吸としてあり、現代が求める宗教・哲学的な思想が抽出できないかという期待である。つまり、ここでは言語が一つの国民的個性的生活の精神的呼吸であり、「世界の見方」を示しているというフンボルトの言語論をうけいれ、主として『みかぐらうた』『おふでさき』の言語解釈をとおして、天理信仰の個性的生活の精神的呼吸と、それが「世界の見方」をどのように感覚、ないしは表象しているかを考えてみたいと思うのである。

宗教的言語は科学技術的言語とは異なり、言葉が意味することを発話し、それが日常的に実践されなければ、そこからは生きた思想の力強さは産出されえない。和辻が当面した問題は、つまるところ学術用語として「やまとことば」はつかえるかどうかという問題でもあった。それは明治初年、西欧からの諸学問の導入にさいして、西周たちは厳密な内容をもった学術用語として「やまとことば」を排し、漢語によるさまざまな新しい造語をころみ、維新以後の日本の学問がそれら学術用語のうえに蓄積されてきたのだから当然のことであったといわねばならないだろう。もちろん、『古事記伝』44巻を漢語を排して完成した本居宣長など先人をなしとししないが、和辻が開拓した道はこの分野で「和辻神話」なるものを生み、数々の後継者によって研究が発展されてきた。以上のような次第で、拙論執筆のわたくしの動機は、和辻が発題した「日本語による哲学」の問題研究が、ながらく『おふでさき』英語翻訳における経験のなかで訳語選択を媒体として心にひっかかっていたことにあった。また、吉本隆明が『思想のアンソロジー』(ちくま学芸文庫、2013年)の結語において、「中山みき『おふでさき』の《解釈》の項で提起した問題、つまり『おふでさき』のなかに、世界思想に拮抗する天理思想のあるなしに関する応答にも通底しているのではないかという思いにもあったのである。